

劉孝儀の「北使還与永豊侯書」について

福井佳夫

一 南北の交流使節

六朝の美文書翰は、典故や対偶の修辭でぶあつく裝飾されている。そのため、なにをかたつたものなのか、主旨を理解するのが、なかなか困難だ。ただ、そうした表現上の難解さは、じつはたいしたことではない。美文書翰読解の真のむつかしさは、まだその向こうに存している。

それは、真情の把握、つまり本心が美的文章の裏にひそんでいて、それを容易にしりがたい、ということだ。じつさい、美文書翰には、ほんとうは甲を欲しているのに、文面では「甲でなく」乙がほしいと、つづるケースがすくなくない。

極端な例をあげれば、本心は立身を渴望しているのに、文面

では「立身などしたくない、隠遁したい」などとつづつたりするのである¹⁾。さまざまな社会的立場があつて、本心をあかしがたいとき、六朝文人たちはこうした、心にもないことを叙することがある。そうだとすれば美文書翰の本心を把握するのは、なかなか容易ではないといわねばならない。

では、我われはどうすればよいのか。まず美文書翰はそういうものだと、覚悟をきめることだ。そしてそのうえで裏読み、つまり行文の裏をよんでゆく習慣をつければよい。この裏読み、それほどむつかしいことではない。現代の我われも、日常の生活のなかで日々おこなっていることだ。よくだされる例だが、だれかが「この部屋はあついな」といえば、それは「窓をあけてくれ」や「エアコンをつけてくれ」の意だろつと、我われは見当をつけることができる。この種の本音と

たてまえの使いわけや、心情の忖度のしかたなどは、過去も現在も、それほどちがっているわけではない。「旧時の、しかも異国のことだから」などと躊躇せず、現代と同種のおもんばかりや気ばたらきを發揮して、書翰文の行文や語気から、六朝文人たちの本心をよみとつてゆけばよいのである。

こつした裏読みをしてゆけば、作者の胸底までよみとれ、「表面上は甲といっているけれども、本心は乙なんだらう」と推測がついてくるはずだ。さらに、当該書翰にかかわる執筆事情や、人間関係なども調査してゆけば、「作者はこついう事情があるから、こつかいているんだらう」とか、「このひとは、こつという性格（考え、思想、立場など）なんだらうな」などと、察知できるようになるだらう。

もっとも、かく裏読みしたとしても、それが正鵠を射ているかどうか、だれも判定してくれない。これが、この種の研究のせつないところだ。しかし当該書翰の内容と、その時期の作者の言動とをつきあわせてゆけば、やがては当否が判明してくることだらう。そのとき心中で、ひそかに一喜一憂すればよい。六朝の美文書翰を読解するさいのやりがいと、そしておもしろさとは、こつしたところにあるといつてよい。

本稿でとりあげる南朝梁の劉潛、あざなは孝儀（四八四～五五〇）がつづつた「北使還与永豊侯書」は、本心がよみとりにくい美文書翰のなかでは、比較的すなおに心情をつづつたものであり、その趣旨は了解ししやすいほうだらう。ただそのはいつても、丹念に裏読みをしてゆけば、表面の発言とはべつに、奥にひそむ作者の心情、さらには本人も気づいておらぬような意識まで、くみとれてくるかもしれない。そこで裏読みのケーススタディとして、この劉孝儀書翰をとりあげ、行文の裏にひそむ作者の思いをさぐつてみよう。

この「北使還与永豊侯書」（北に使いし、還りて永豊侯に与うるの書）は、標題がしめすように、劉孝儀が「北使」（東魏への訪問）から帰還したあと、わかき永豊侯こと蕭摛（梁武帝の弟の子である。五一五～五七三）におくつた書翰文である。使者として見聞したことを叙しており、一種の帰還報告のような内容になっている。

では劉孝儀が「北使」、つまり北方の東魏へ使者としてでむいたのはいつで、そしてどのような事情だったのだらうか。史書をひもといてみると、ことの発端は、大同二年（五三六年、東魏では天平三年）に、梁武帝と東魏の高歡とのあいだ

で和平交渉が合意し、使節の交流がきまったことにあるらしい。『南史』梁本紀中に「大同二年」十二月壬申、「梁は東魏と通和す」とあり、また『北史』李諧伝にも「天平末、魏は梁と和好せんと欲す」とあるから、両国のあいだで使節を往来させることが、正式にきまったのだらう。もちろんこれ以前にも、南北の交流がおこなわれていたのだが、このとき以後、交流使節の往来がいよいよよくなったのである。

劉孝儀の北方訪問も、こうした南北交流の一環であった。合意の翌年の大同三年以後、史書には孝儀の東魏訪問もふくめ、毎年のように南北交流の記事がかかげられている。『南史』武帝紀中からそれをひろえば、つぎのようである。

「大同」三年秋七月癸卯、東魏の人來聘す。九月、兼散騎常侍の張臯をして東魏に聘せしむ。

「大同」四年夏五月甲戌、東魏の人來聘す。秋七月戊辰、兼散騎常侍の劉孝儀を東魏に聘せしむ。

「大同」五年冬十一月乙亥、東魏の人來聘す。十二月、兼散騎常侍の柳豹をして東魏に聘せしむ。

このなかでは、大同三年七月における東魏使節の梁訪問が、とくに有名になっている。このときは東魏の李諧、盧元明、

そして李業興（李鄴とする資料もある）らが、南方の梁を訪問したのだった。そして、彼らが梁武帝や朱异らを相手に、丁々発止とやりあっているようすが、『北史』李諧伝や『魏書』李業興伝に活写されている。梁皇室の一員だった蕭摛（孝儀書翰の受取人）も、武帝から「辞令觀るべし」とみなされたためか、年少ながら応接の場にかりだされている（『周書』蕭摛伝）。

ところで、右のうちの大同四年七月の梁使節の派遣が、劉孝儀の「北使」に該当する（傍点）。このことは本伝にも、

「劉孝儀は」大同三年、中書郎に遷り、公事を以て安西諮議參軍に左遷せられ、散騎常侍を兼ね。四年に「魏に、使いして還るや、復た中書郎に除せらる。」

と記述されている（『梁書』卷四十一劉潜伝）。この使節派遣、同年夏五月甲戌に「東魏の人來聘す」という記事があることからみれば、おそらくその答礼だったらうとおもわれる。つまり孝儀は、いわば両国の友好ムードがつづくなか、初秋七月に梁の使節団をひきいて北地に出立したのである。

この「北使」は劉孝儀にとって、最初の「そして最後でもあった」北方訪問だった。梁朝を代表して訪問するわけだけ

ら、けつして粗相があつてはならない。そこで出発するまえ、孝儀は前年に東魏の使節と応対した蕭撫などから、いろいろな情報や知恵をさずかったにちがいない。そして孝儀は、初秋に出発して東魏を訪問し、いろんな公式非公式の行事をすませ、同年か翌年にぶじ梁に帰還することができた。

こうして帰還したのち、彼は情報提供のお礼もかねて、蕭撫にむけて本稿でとりあげる書翰「北使還与永豊侯書」をつづつたのだつた。このとき孝儀は五十五歳。当時としてはそつとつうの老人だつたはずだ。いつぼう、蕭撫のほうはまだ二十四歳。皇室の一員でもあり、前途洋洋たる若者であつた。

二 「北使還与永豊侯書」の内容

さて、こうしてかかれた劉孝儀「北使還与永豊侯書」はどのような内容なのか。みじかいものなので、まずは書翰全体の原文と訳文とをかかってみよう。

足踐寒地、暮宿客亭、飄飄辛苦、迄届甦郷。
身犯朔風、晨炊謁舍。

雑種覃化、頗慕中国。

兵伝李緒之法、而靄幙難淹、
楼擬衛律所治、酪漿易鑿

王程有限、時及玉関。

射鹿胡奴、乃共帰国、
刻龍漢節、還持入塞。

馬銜苜蓿、嘶立故墟、

人獲蒲萄、帰種旧里。

稚子出迎、

倦握蟹螯、未改朱顔、略多自酔。

善鄰相勞、

亟覆蝦蟆。

用此終日、亦以自娛。

我われは寒冷の地へ足をふみいれ、北風に身をさらしました。夕暮に駅亭に宿をとり、朝方に宿舎で食事の準備をします。北地をさまよつて辛酸をなめ、ようやく天幕の都邑につきました。東魏の胡族は教化をうけて、中華の礼楽をしたっております。軍事は「漢人の」李緒がおしえた兵法を範とし、建物も衛律の建てかたを模しています。それでも、やはり彼らの天幕にはすみにくく、酪漿もすぐあきてしまいました。

朝命による旅程の都合もあつて、我われは「帰途につき魏と梁の」関門にたどりつきました。鹿狩りが

うまい胡奴をつれて帰国し、龍紋のある符節をもって「梁内」の要塞にはいったのです。「かえってきた」馬どもは首宿あしゆくをたべながら、故国の地でいななき、随従の人びとは蒲萄ぶどうの種を手にもち、郷里にそれをつえるつもりです。

幼児たちは私をでむかえ、近所のひとたちもねぎらうてくれました。くたびれつつも蟹のあしを手にとり、そそくさと酒杯をかたむけます。すると、それほどあかくならぬのに、いささか酒酔いしてしまいました。こうしてその日はおわり、すっかりたのしんだものでした。

これが「北使還与永豊侯書」の現存するすべてである。六朝書翰の行文は概して修辞で装飾され、美的になっていることがおおいが、この孝儀書翰もそつした性格をそなえている。この書翰は全三十句。そのうち二十句が対偶を構成し、対偶率は67%。また四字句は二十八句で六字句は二句、その他の句はゼロであり、四六率は100%。そして全八聯（うち隔句対二聯）のうち、七聯が末尾の平仄を対応させており、声律率（じじうさいは上尾を忌避した率）は88%ということになる。

こうした丹念な修辞技巧をほどこした行文は、六朝美文の典型だと評してよからう。

ところで、この孝儀書翰はおそらく完篇でなく、前後の字句が略されているのだとおもわれる。当時の美文書翰は、おおく「時候のあいさつ、相手のようす、自分の近況（用件）」の三段から構成されていた。右の文章は、そのうちの「自分の近況（用件）」（第三段）の部分のみだろうと推測される。この孝儀書翰は、『芸文類聚 卷五十二治政部の「奉使」（国命を奉じて使節として国外にでかける、の意）の項にひかれて、現在までつたわったものだ（『初学記』と『太平御覧』でも「奉使」の項に採録されている）。すると、「奉使」に係した部分だけが引用され、それ以外の「時候のあいさつ」や「相手のようす」、さらに「自分の近況（用件）」の末尾にあるはずの結語の字句などは、無用の部分としてきりすてられたのだろう。

それゆえ現存する部分は、東魏への使節に関連した内容ばかりががつづられている。以下、字句をおいかけながら、全体を概観してみよう。

まず「冒頭から「酪漿易饜」までの十二句は、北地です

ごした日々を回想したもの。そのうち「迄届氍郷」句までは、東魏訪問の往路を叙したものだろう。はじめから「飄飄辛苦」句までは、北方の荒野をすすみゆく使節団の辛苦ぶりを叙したものだ。「迄届氍郷」句の「氍郷」は、直訳すれば「獸毛でつくった」天幕の里「ぐらいの意だが、おそらく東魏の鄴都を暗示しているのだらう。魏は鮮卑族がたてた国家なので、遊牧民族が愛用した天幕がおおかつたはずだ。南方生まれの孝儀には、その天幕が特異なものにみえたので、それでこう表現したのだらう。いっぽう「雑種羶化」以下の六句は、北地滞在中にみた東魏の国ぶりを叙したものだ。東魏の胡族たちは、漢族のすすんだ文化を受容していると、「すくなくとも表面的には」好意的に記述している。

つづく「王程有限」から「帰種旧里」までの十句は、使節としての役わりをおえ、梁への帰還のようすを叙したものだ。まず「王程有限」二句は、梁の領土内へ帰還したことをいうのだらう。「玉関」（正式には玉門関）は漢の武帝のとき、甘肅省の敦煌あたりに設置した関所の名である。場所的には東魏の地とがさならないので、ここではじつさいの玉門関でなく、東魏と梁の境界に設置された関所をさすのだらう。直

前の「李緒」や「衛律」（ともに漢武帝のころ、匈奴に亡命した人物）がそうだし、また直後の「射鹿胡奴」や「刻龍漢節」（ともに漢武帝のころの張騫の故事をふまえる）もそうなのだが、このあたり、漢武帝のころの西域の故事を利用した表現がめだっている。さらに故事ではないが、「苜蓿」や「蒲萄」も、ともに西域由来ものだ。おそらく孝儀は、盛世と意識された漢武帝のころ、さらにそのころの西域との外交の話柄に、現今の「梁武帝がおさめる」時代をかさねて叙しているのだらう（後述）。

この帰国場面は、後世において、冷涼な北地から漢土への帰還という点で、前漢の蘇武（あざなは子卿しけい。前一四〇？～六〇年）が匈奴から漢に帰国した話柄を連想させやすかつたようだ。そのためか清の許槿は、『六朝文絮』にこの作を採録したうえで、

絶妙なる一幀の 子卿帰国の図 なり。行役の景象を写して、酸涼なること目に満みてり。

と評している。満目蕭条たる荒野のなか、任務をはたして帰還する孝儀一行は、「子卿帰国の図」を想像させるものだったのだらう（ただし、風雪にたえ野鼠や草の実をくらって、

十九年目に生還した蘇武とは、実態はまったくことなっている。(この孝儀書翰は、右にみた装飾された美的行文とともに、こうした画趣ゆたかな描写によって、後世、許漣らによって珍重されることになったのだった。

さての「稚子出迎」から末尾までは、自宅へ到着して家族と団欒するようすを叙したもの。「稚子出迎」は、陶淵明「歸去來辭」の「僮僕は歓迎し、稚子は門に候つ」をふまえており、ほのぼのとした家族交歓の場面をえがいたものだ(ちなみにこの「稚子」は、孝儀自身の子としては、すこしおさなすぎる。孫か、あるいは親族の幼児だったのかもしれない)。この部分は、これ以前の荒涼たる情景とは違ってかわつて、平和でのかな日常をえがいており、いかにも故国へかえってきたという雰囲気をもしだしている。

類書にひかれた孝儀書翰は、この「亦以自娛」句でおわっている。だが手紙の末尾として、こうした内容でおわるのは、いささか不自然である。おそらくこのあとに、「このようにぶじ帰参しました。はやく貴殿にお会いして、久闊を叙したものです」のような結びの字句が、つづいていただろう。

三 蔑視感情

以上が、劉孝儀書翰の概観である。だが冒頭でものべたように、六朝美文というものは字句の奥に、いろんな思いや意識をひそませていることがすくなくない。それゆえ美文書翰の読解では、右のごとき概観だけで満足せず、字句の裏をよんで本心をさぐってゆくことも必要だ。そこで揣摩臆測だといわれぬよう留意しながら、孝儀書翰の裏読みをしてゆこう。

第一に、この書翰には、東魏やそこにすむ胡族への蔑視感情が、ひそんでいることを指摘したい。これは、の部分に顕著だ。まず「氈郷」(天幕の都邑)という語の使用に、そうしたニュアンスがありそうである。ただしこれは、みなれぬ天幕へのおどろきで、この語をつかったにすぎない、と弁護することもできないはない。

だが、つづく「雜種置化」(東魏の胡族は教化をうけて)以下には、かなり露骨な蔑視意識がうかがえる。たとえば「雜種」の語、これは日本語のニュアンスとはちがって、胡族を侮蔑した言いかたである。孝儀の同時期の用例をさがし

てみれば、梁の庾肩吾「乱後経呉郵亭詩」に、

「獯戎鞭伊洛 獯戎のやからが伊洛の地を鞭うち

「雑種乱轅轅 雑種の連中が轅轅の地を混乱させた

という用例がみつかった。ここの「雑種」の語は、「獯戎」の対語としてつかわれているのに注意しよう。つまり「獯戎」どうよう、中華の地をおかそつとする夷狄の連中、というニユアンスを有しているのだ。

この劉孝儀書翰は表面上、そつした「雑種」であつても「教化をつけて、中華の礼楽をしたつており」（雑種覃化、頗慕中国）と、好意的にのべている。だからこそ孝儀も、はるばる東魏へ友好使節としてきているのである。しかしそうした好意的な記述をしているにしても、その底にはやはり東魏を「おくれた胡族ども」と、下にみようとする意識があることは注意せねばならない。孝儀にとつて東魏の連中は、中華の礼楽をしたつてはいても、しよせん文化的におくれた夷狄にしかすぎなかつたのだらう。

つぎの「兵伝季緒之法、楼擬衛律所治」（軍事は「漢人の」李緒がおしえた兵法を範とし、建物も衛律の建てかたを模しとおります）の対偶は、いわば「覃化」（教化をつける、の

意）の成果といふべきものだ。上句は東魏が前漢の季緒の兵法をつけつぎ、下句は衛律がおしえた漢の建築法をまなんている、とのべたもの。ともに「漢のおかげで文明化した」といつているわけで、これもいくぶんか東魏をみくだした表現だといつてよい。くわえて、ここであげられた季緒と衛律の兩人は、ともに漢から匈奴に亡命した人物であり、漢族からみればマイナス的要素をもっている（くわしくは注3の注釈を参照）。東魏は、そつした兩人に由来する兵法と建築法とをまなんだ、ということであつて、このあたりにも底意地の悪さが感じられなくもない。

つづく「毳幘難淹、酪漿易壓」（彼らの天幕にはすみにくく、酪漿もすぐあきてしまいました、の意）の二句も、軽侮するような響きをもつ。つまり東魏には、兵法しかり建物もしかりで、漢族由来のものがないわけではない。しかし、それらはしよせん本物ではなく、きつすいの漢族には満足できるものではない。くわえて自分には、胡族たち特有の「天幕にはすみにくく、酪漿もすぐあきてしま」つた、といいたいのだらう。いくら漢族にまねて文明化しようとしても、こんな家にすみ、こんな食べ物をたべているようでは、とつてい

仲間入りはできないぞ、という口吻である。

こうした見かたをしてくれば、の冒頭に使用されていた「足もて寒地を踐む」や「身もて朔風を犯す」「飄飄し辛苦して」などの字句も、いかにも北方の荒地へやってきた、という響きを有していることに気づく。これらの表現、北地といっても、「前漢の蘇武のように」シベリアにきたわけでもなし、すこしおおげさな感じがしないだろうか。

そういえば、さきに見た「氍郷」の語もどうよの傾向があった。東魏はもちろん胡族がたてた国だが、そうはいっても、おおくの漢人も居住していたはずだ。それゆえ、天幕以外の漢族ふうの建物もたくさんあったはずなのに、孝儀はただ「氍郷」という語で表現するのみだった。こうした字句は、孝儀の心奥に「東魏には天幕しかないだろう」という蔑視感情があつて、それが「東魏は胡族の国 天幕ばかり 氍郷」の語の使用」というふうにつながつていったのではないかとおもわれる。

これにかぎらず、この劉孝儀書翰には、全体をとおして「こんな北地まできてしまった」「胡族の風俗は自分にはじつくりこない」のような、意にそわないとか不愉快だとかの気

分がただよっている。つまり胡族的なものに腰がひけていて、なるべく忌避したいという姿勢がみえるのである。それは、たとえば「未知の地をゆくのはワクワクする」や「胡族の生活ぶりをきちんと観察しよう」のとき、好奇心とかチャレンジ精神とかいうものとは、正反対の心のもちようだといつてよい。この書翰文にただよう胡族蔑視の感情は、そうした孝儀の心のもちようとも、いくばくか関係があるように感じられる。

四 陳腐な先入観

第二に、劉孝儀は先入観にとらわれて、事実をただしく認識していないのではないか、ということも指摘できよう。これは、の帰国を叙した場面によくあらわれている。ではいきなり、「王程有限、時及玉関」（朝命による旅程の都合もあつて、我われは「帰途につき魏と梁の「関門」にたどりつきました、の意）という二句がきて、帰途の記述であることをつけている。ここの二句目にてくる「玉関」の語は、孝儀の先入観によって布置されたもので、不正確な事実認識を示

唆するものではないかとかんがえられる。

この「玉関」は、正式には玉門関といい、甘肅省の敦煌あたりにあった関所の名である（前出）。漢武帝のときに西域経営のため設置され、以後ずっと中国と西域諸国との境界になってきた。かく玉関は中国の西北端にあるのだから、当時としては西魏に属することになる。するとこの場合で、この語をつかうのは不適な用法ということになる。孝儀は、そうしたことを知悉したうえで、あえて「玉関」を東魏と梁との境界の意でつかったわけだ。こうした使いかたは、中国の修辭学では「借代」と称されるものである。

ところで、ここからが私の裏読みになるのだが、この「玉関」の語の利用は、ただ修辭的な技巧というだけでなく、彼の先入観も介在していたのではないか。すなわち、孝儀の脳裏に「東魏　遊牧民族　玉関のむこう」という、あやまった連想がはたらいた。その連想が先入観となって、「現実のうえでは不適な」この語をつかってしまった——とおもわれるのだ。そして、そうした先入観を有することじたい、孝儀が東魏の実態を正確に認識していなかったことを、暗示しているのではないだろうか。

というのも、これ以後も地理的に不適な西域関係の典故が、しばしばつかわれているからだ。つづく「射鹿胡奴、乃共帰国」（鹿狩りがうまい胡奴をつれて帰国し）では、前漢の張騫の西域訪問の故事（『史記』大宛列伝）をふまえている。漢武帝は大月氏と同盟して、強盛をほこる匈奴を挾撃しようとかんがえた。そこで張騫を抜擢して、大月氏に派遣した。張騫は匈奴人の甘父らをひきいて隴西を出発し、さまざまの苦難をへて、「大月氏との同盟こそうまくゆかなかったが」十三年後に、匈奴でめとった妻や甘父らをつれて漢に帰国したのである。鹿狩りがうまい胡奴とは、この甘父をさす。また、これに対応する「刻龍漢節、還持入塞」（龍紋のある符節をもつて「梁内の」要塞にはいったのです）二句も、張騫の故事をふまえる。彼は大月氏をたずねる途中、匈奴にとらわれてながく虜囚の身となったが、漢の使者のあかしである符節は、けつして手ばなさなかつたという話である。

さらに、つぎの隔句対をなす四句、「馬銜首宿、嘶立故墟、人獲蒲萄、帰種旧里」（「かえってきた」馬どもは首宿をたべながら、故国の地でいななき、随従の人びとは蒲萄の種を手にもち、郷里にそれをうるつもりです）も、『史記』の

故事に依拠している。すなわち大宛列伝に、「宛の左右は蒲陶を以て酒を為^つり、富人は酒を蔵して万余石に至る。久しき者は数十歳ありても「腐」敗せず。俗は酒を嗜^ぶみ、馬は苜蓿を嗜^めり。漢使は其の実^みを取り来たる。是に於いて天子始めて苜蓿と蒲陶を肥饒の地に種^つえたり」とあるのをふまえたものだ。この四句中にでてきた「苜蓿」（ウマゴヤシ）と「蒲萄」とは、この張騫の西域訪問を契機として中国へつたわったのだった。

このように、「射鹿」「云々と」「馬銜」「云々では、ともに西域や張騫関係の故事をふまえている。東魏訪問を叙したこの書翰中で、右のような故事をつかうのは、地理的にも歴史的にも合致しないので、ほんらいは適切とはいえないやりかたである（さらに厳密に言えば、匈奴と鮮卑という異種族をこっちゃんにしているのも不可である）。にもかかわらず、これほど西域や張騫関係の故事をひいてくるのは、「東魏＝西域」の考えが、孝儀の脳裏のなかで修辞技巧のレベルをこえ、先入観として根づいていたからだろう。

私見によれば、孝儀にとっては、その種の「地理的かつ歴史的な」齟齬はどうでもよかつたのだろう。彼は、よむ者に

「東魏は草原の遊牧民だ」と印象づけられれば、それでよかつた。そして、それにふさわしかつたのが、「史記」中の匈奴や張騫の話柄だつた「というより、それ以外におもいつかなかつた」のだろう。つまり彼は、「東魏は草原の遊牧民だ。

草原の遊牧民といえば匈奴にきまつている。そして匈奴といえば張騫の話だ」という連想や先入観にもとづいて、こうした不適切な故事を列挙していったのだとおもわれる。寒地、朔風、霧凇、酪漿など、草原の遊牧民といえはすぐ想起されるような、ありふれた字句がでてくることもあわせ、こうしたところに、孝儀の先入観に支配された執筆態度がうかがえるのである。

そうした先入観で字句をつづり、典故をならべた結果、読者にとつて、「北使還」永豊侯書」の文章はどこまでが事実で、どこまでが故事なのか、判断がむづかしくなつてしまつた。

たとえば、右の「射鹿」四句は、「鹿狩りがうまい胡奴をつれて帰国し、龍紋のある符節をもつて「梁内の」要塞にはいったのです」の意だが、筋ちがいの典故をつかつているので、具体的にどうということなのか、わからなくなつた。典拠

の『史記』大宛列伝によれば、張騫は匈奴につかまつたり、大月氏に同盟をこころわられたりして、辛苦のすえに帰国したという。すると孝儀は、自分も同種の困難に遭遇した、といいたいのだろうか。さらに「鹿狩りがうまい胡奴」（張騫の場合が甘父）とあるが、孝儀の場合はだれをさしているのか。そもそも彼には、真にそつした部下がいたのだろうか。また孝儀はほんとうに龍紋のある符節をもって、「梁内の一要塞にはいったのか等々」。事実を直書せず典故をつかつて叙したため、虚実がごつちやになつてしまつて、なにがほんとうやら、さっぱりわからなくなつてしまつたのだ。

おなじく「馬銜」云々の四句は、「かえつてきた」馬どもは首宿をたべながら、故国の地でいななき、随従の人びとは蒲萄の種を手にもち、郷里にそれをうるつもりです」の意味である。この部分も、『史記』大宛列伝に依拠した行文だ。すると、馬が首宿をたべ、故国の地でいななきはよいとしても、「随従の人びとは蒲萄の種を手にもち、郷里にそれをうるつもりです」は、事実なのだろうか。漢武帝の時代に蒲萄は中国にはいつているのだから、孝儀のころには、もう伝来ひざしかつたはずだ。このときあらためて、蒲萄の種を郷

里にもちかえる必要があつたのだろうか。ここでも典故をつかつて叙したため、どれが事実でどれが文飾なのか、我われは頭をひねらなければならなくなつてしまつたのである。

五 優等生の感想文

第三に、この書翰文の内容が、類型的なものにすぎぬといふこともいえそうだ。さきに、文章の奥に胡族への蔑視感情がひそんでいゝること、先入観に由来する典故をならべていゝことの二点を指摘してきた。この二点は、めずらしい特徴なのかというところ、けつしてそうではない。前者は、当時の南朝文人の平均的胡族観が反映したものにすぎないだろうし、後者も、典故をならべることに関心をもつ彼らには、ごくありふれた文章の書きかただつたはずだ。要するにそれらはともに、ごくふつ々の類型的な叙しかたであり、また内容にすぎないのである。

じつさい、「北使還与永豊侯書」中にみえる、

東魏の胡族は教化をつけて、中華の礼樂をしたつてお
ります。

彼らの天幕にはすみにくく、酪漿もすぐあきてしまいました。

などの内容は、特段かわったものではない。おそらく孝儀でなく、べつの南朝文人が北方へ旅したとしても、つづりそのような字句だろう。さらに書翰中でてくるつぎのような用語、

寒地、朔風、氍毹、雜種、覃化、毳幘、酪漿、玉関、苜蓿、蒲萄

も、やはり珍奇なものではない。胡族の生活や習俗を叙そうとすれば、おそらくだれもが使用するような語彙だろう。

また、書翰中で孝儀が使用した典故もどうようであって、類型的で陳腐そのものだ。人名としては李緒と衛律がでてるだけだが、ほかにも前漢の武帝、李陵、蘇武、張騫、甘父らの事迹がちりばめられていて、行間の奥にちらほらその姿が揺曳している。どの人物も、『史記』『漢書』の匈奴関係部分をめくれば、すぐにみつかるようなひとばかりだ。さきに書翰中の帰国場面を、許槿が「絶妙なる一幀の 子卿帰国の図なり」云々とのべ、孝儀の帰国と蘇武（子卿）の帰国とを二重うつしにしていたことを指摘したが、そうした見かたは、許槿がとくに炯眼だったからではない。孝儀書翰をよめ

ば、だれでも蘇武帰国の場面を想起したはずであり、逆にいえばそれほど陳腐で、ありふれた表現だったのである。

この種の、旅行中の出来事や見聞を叙した文学として、兩漢にはじまる紀行の賦がある。劉歆「遂初賦」や班彪「北征賦」、蔡邕「述行賦」などがそれだ。これらはいずれも、想定外の旅をしいられて異郷の地をたずねてゆくうち、脳裏にふと各様の過去の出来ごと（故事）を想起してゆく、という内容である。その意味で、紀行ふう叙景と心象ふう故事とがまじりあつた、景情相即の文章だといってよい。そうした先行する紀行ふう文学と比較すると、「異ジャンルの作品ではあるが」この孝儀書翰は、叙景も故事ともに陳腐そのもので、かなり見劣りするものだといつてよい。さらに、「稚子出迎、善鄰相勞」二句まで、陶淵明「歸去來辭」の「僮僕は歓迎し、稚子は門に候つ」に依拠したものだと思えば、典故をならべたのでない、孝儀個人が実見し、実体験した事ながら、この書翰中にいったいどれほどあるのか、といいたくなるほどである。

このように、この「北使還与永豊侯書」は、達見をつづつた報告書とも、観照にみちた紀行文ともいいがたい、陳腐な

書翰文にすぎない。その行文は、対偶や典故を多用して美的につづられているが、しかし内容的には、先入観に支配されていて、類型的な事がらしか有していないのだ。その意味でこの書翰文は、いわば優等生がかいた、修学旅行の感想文のごときものといつてよからう。

優等生といえば、劉孝儀の生涯を点検してみると、彼の経歴も優等そのものだ。彼の本伝（『梁書』巻四十一）によると、劉孝儀は文人として著名だった劉絵を父とし、長兄に劉孝綽、六弟に劉孝威がいるなど、文運さかんな一家にうまれた。兄の劉孝綽から「三筆六詩」（三弟の孝儀は文章にすぐれ、六弟の孝威は詩にすぐれる、の意）と称され、じつさい孝儀が撰した「雍州平等寺金像碑」は、その宏麗さをたたえられたという。

官人としては、彼は皇太子の蕭綱の庇護をうけつつ、安北功曹史、太子洗馬、太子中舍人、建康令、中書郎、尚書左丞、御史中丞などの高官を歴任している。ただ晩年には、侯景の乱に翻弄されて、豫章郡を失陥するなどの苦難をなめ、まもなく病没してしまった。かく最期は尋常な死にかたではなかったが、しかし梁末をいきた人びとにおいては、それはめずら

しいことではなかった。それゆえおおざっぱに言えば、孝儀は梁朝の全盛期に大半をすこし、順調な官場生活をおくったひとだったといつてよい。本稿がとりあげた東魏への訪問は、そうした彼のはなばなし官歴のうちのひとつなのである。

かく劉孝儀は文学的才にめぐまれ、政治的にも諸官をそつなくこなすなど、それなりの能力をもっていたようである。すると、類型的な感想文にすぎぬというのは、この書翰がそつうだといつただけで、これとはべつに、達見や洞察にみちた「朝廷への」報告書や旅行記をかいていたかもしれない。そつうだとすれば、この書翰一篇だけでもつて、孝儀を凡庸な見かたしかできぬ男だときめつけるわけにはいかないだろう。

だが現実的には、劉孝儀にそつうした書物があったことをきかない。『隋書』経籍志には、「梁都官尚書劉孝儀集二十卷」とあるだけなので、書物としては旅行記の類はなかった可能性がたかい（ただし文集の「二十卷」のなかに、朝廷への報告書がふくまれる可能性はある）。くわえて明の張溥は『漢魏六朝百三家集』において、劉孝儀と劉孝威の兄弟をあわせ評して、つぎのようにのべている。

假使時清国晏、兄弟連騎、統玄圃之旧遊、領高齋之述作、

扶風世業 鄴苑清吟、重篇大帙、必偉觀聽、而長鯨疾驅、
逃死不暇。林焚池竭、遺章濶如。(劉孝儀孝威集題辭)

もし時勢がよくて国が安泰で、「劉孝儀孝威の」兄弟が馬をつらねて散策できていたなら、二人はきっと玄圃苑での清遊をつづけ、高齋での詩文創作を領導したことだろう。さらに扶風での「班彪父子の」文業のことく文章をつらね、鄴都での「曹操父子や建安七子の」清吟のことく詩歌をつくり、それが山のように積みかさなつて、きつと人びとから愛誦されたことだろう。ところが侯景があらまわり、二人とも害からのがれることができなかった。林はもえつき池もかれはて、彼らの詩文もうしなわれてしまったのである。

張溥は、劉孝儀「とその弟」のことを、「玄圃苑での清遊をつづけ、高齋での詩文創作を領導したことだろう」という。このように、彼はどちらかといえば、政治家というより、班彪父子や建安七子のごとく、文章をつづり詩歌を吟じる文人タイプのひとだったようだ。かく文章や詩歌は得意だったので、東魏使節としてでかけ、宴席の場で詩文を応酬しあつたりすることは、彼は手なれていたはずだ。だが、東魏の政治

や軍事状況を、あれこれ視察してくるようなことは、あまり得手ではなかったのだろう。いやそれよりまえに、彼は軍事や謀報の類には、まったく関心がなかつたようだ。だから、「南北間に一朝事あつたときは、参考に供せられるよう、精確に敵情を視察しておこう」というような意識は、もちあわせていなかつたらうとおもわれる。

これを要するに、劉孝儀は敏腕な政治家というより、詩文に長じた文学のひとだった、といつてよさそうだ。そうした文学のひとについて、南北間を流浪した苦勞人、顔之推は彼の『顔氏家訓』涉務において、

吾見世中文学之士、品藻古今、若指諸掌、及有試用、多無所堪。居承平之世、不知有喪乱之禍。处廟堂之下、不知有戰陳之急。保俸祿之資、不知有耕稼之苦。肆吏民之上、不知有勞役之勤。故難可以應世經務也。

いわゆる「文学の人」なる者に対する私の見解を述べてみよう。彼らは歴史上のあらゆる事件に関して、丸で掌の上の物を指さすような批判をする。ところが、その彼らを何かの職務につけてみると、たいていは全く物の役に立たないことが多い。大体彼らは太平の世

に生まれあわせたので、争乱という不幸があることを知らず、中央の結構な大官庁に坐っているので、戦場での生きるか死ぬかの目まぐるしい変転を知らない。

その身は俸禄の保証を受けているので、農民の作業が如何に苦しいかを知らず、下級官吏や一般民の上にあぐらをかいているので、種々の労役での目のまわる思いを知らないでいる。こんな体たらくだから、「いわゆる文学の人が」世間の問題に即応して、適宜の責務を果たす能力に欠けているのも、至極当然な話だといえるわけだ。

とかがたっている（宇都宮清吉氏の訳文による）。おもつに孝儀は、之推がいう「太平の世に生まれあわせたので、争乱という不幸があることを知らず、中央の結構な大官庁に坐っているのので、戦場での生きるか死ぬかの目まぐるしい変転を知らない」ようなひとだったのではあるまいか。じっさい、この優等生の感想文のごとき「北使還与永豊侯書」をよむかぎり、孝儀は「太平の世に生まれあわせた」無難な文化使節であつて、敏腕な軍略家でも政治家でもなかつたらうと推測されるのである。

六 ホツとしたわい

第四は、劉孝儀の脳裏にあつた故国は、北方ではなく南方のほうだったということだ。というのも、この「北使還与永豊侯書」中で孝儀は、

射鹿胡奴、乃共帰国、

鹿狩りがうまい胡奴をつれて帰国しました。

馬銜首蓓、嘶立故墟、人獲蒲萄、帰種旧里。

「かえってきた」馬どもは首蓓をたべながら、故国の地でいななき、随従の人びとは蒲萄の種を手にもち、郷

里にそれをつえるつもりです。

と叙していた。この叙しかたからみれば、孝儀はあきらかに江南の梁を故国だとかがえていたようだ。当時、彼は建康を都とする南朝の梁につかえていたわけだから、こうした字句はあたりまえといえ、あたりまえのことかもしれない。

しかしよくかがえてみれば、劉孝儀など梁朝の人びとにとつては、北方こそ中原であり、故地であつたはずなのである。彼ら漢族の人びとは西晋の末、北方を胡族に占拠されて

しまったので、やむなく南方に避難したわけで、やがては胡人をおいはらって、北方の中原の地へ帰還するのを念願としていたはずなのだ。すくなくとも、名目上はそうでなければなるまい。ところが、この書翰では南方の梁の地を「故墟」「旧里」と称し、そこにかえることを「帰国」といつている。すると孝儀の脳裏では、「故国＝中原の地」という意識はまったくなくなっているとおもわざるをえない。

劉孝儀より二百年むかしは、そうではなかった。永嘉の乱をきっかけとして、胡族に北中国を占拠された西晋の指導者たちは、大挙して長江をわたり、江南の地へにげてきたのだった。そしてその地に東晋王朝を樹立して、かろうじて漢族政権の灯をまもつたのだった。その東晋王朝の樹立に尽力した王導に関して、

過江人士、每至暇日、相要出新亭飲宴。周顛中坐而歎曰、「風景不殊、舉目有江河之異」。皆相視流涕。惟導愀然變色曰、「當共勦力王室、克復神州、何至作楚囚相對泣邪」。

衆收淚而謝之。（『晋書』王導伝）

長江をわたってきた人々たちは、休日になるとつれだつて新亭にでかけ、みなで酒宴しあつた。周顛が途中で

なげいていった。「風も光景もおなじだが、みまわすと江河がちがつているぞ」。すると、みな顔を見あわせて涙をながした。ただ王導だけ色をなしていった。「我われは協力して晋室をまもり、中原を回復せねばならぬ。どうして楚囚のごとく涙をながすだけでよかるつか」。これをきくや、みな涙をこぼすのをやめ、謝罪したのだった。

という話柄がつたわっている。この話中での王導らは、いま自分たちがいる健康の地を、けつして故国とおもっていない。彼らにとつては長江の北こそ故国の地であり、かならず「中原を回復せねばならぬ」。だが、いまはかえれないので、「みな顔を見あわせて涙をながし」ていたのである。

ところが、それより二百年後の孝儀は、すっかり南方の江南の地になれてしまつて、その地を故郷とおもいこんでしまつている。そして逆に、北方を「雜種」が支配する「氍郷」とし、「糞幘」にすまい、「酪漿」を食している荒蕪な地だとみなしているのだ。やはり二百年という年月は、自分の故地さえわすれてしまつほど、ながいものだったのである。

第五に、劉孝儀はせっかく北方の東魏へいきながら、その

地の山水をえがくことに、あまり熱意をもっていないことだ。北地の山水を描写したといえるのは、せいぜい右にあげた「かえってきた」馬どもは首宿をたべながら、故国の地でいななき、随従の人びとは蒲萄の種を手にもち、郷里にそれをうるつもりです」ぐらいいである。もっともこの部分とて、東魏と梁との国境付近「の梁内の地」を叙したものであって、厳密に言えば東魏の土地ではない。孝儀にとって、北方の東魏は未知の地であつたはずだが、そこには叙するべきなんの山水もなかつたのだろうか。

いっぽう、南方の地のほうは、美的な景觀として、しばしば詩文でとりあげられてきた。一例だけあげれば、梁の陶弘景の「答謝中書」という書翰文では、

山川之美、古来共談。

高峰入雲、

清流見底、

兩岸石壁、五色交輝、

曉霧將歇、

青林翠竹、四時俱備。

猿鳥亂鳴。

夕日欲頽、實是欲界之仙都。

沈鱗競躍。

山川の美しさはむかしから誰もがかたっています。高

い峰は雲にかくれ、清流は川底がすけてみえます。兩岸の石壁は五色にかがやき、青林緑竹は、年中あざやかです。朝霧がはれようとするや、猿や鳥があちこちでなきはじめ、夕日のしずまんとするや、川底の魚はきそうようにはなまわっています。これこそが、人間世界の仙都というべきでありましょう。

のことく、うつくしい山水が叙されている。こうした美的な描写は、山水がじつさいにうつくしかったということもさることながら、文中に「これこそが人間世界の仙都です」とあることく、山水を仙人や隠者がすまう地、つまり理想郷だとみなす考えかたがつよかつたからだとおもわれる（この陶弘景書翰は『芸文類聚』の卷三十七にひかれるが、同巻は「隱逸」の篇なのである）。つまり思想（おもには道家の思想）の後おしがあつて、それによって山水が理想化され、うつくしくみえたということだろう。

すると、劉孝儀が北地の美景をえがかなかつたというのは、ただ北方の自然が「南方にくらべて」うつくしくなかつたという、単純なことだけではなかつたのではないか。私見によれば、彼の脳裏に「北方は胡族の地　隠者がいない

「隠者がすまう」理想の山水もない」という連想があつて、そのため山水がうつくしくみえなかつたのではないかとかがえられる。このように自然の美というものは、ただ目のまえの山水が、現実に美的かどうかというだけでなく、それをみる人びとの見かたや思想によつても、左右されてくるものなのだ。その意味で、こつした自然の描きかたひとつとつても、「北方」胡族の地」という先入観がかかわっていることに、あらためて気づくのである。

第六に、「幼児たちは私をでむかえ、近所のひとたちもねぎらつてくれました」（稚子出迎、善鄰相勞）の二句に、陶淵明「歸去來辭」の語句を利用して、この句にも注目しよう。この部分は、帰国した孝儀が家族と団欒するようすを叙したものであり、「北使還与永豊侯書」のなかでは、典故による表現ではあつても、心のなごむ一節だといつてよい（この句は、六朝でも早期の「歸去來辭」の受容だといつてよい。蕭統蕭綱兄弟の淵明好きが、孝儀にも影響したのかもしれない）。

ここで留意したいのは、稚子がでむかえたのは、典拠の「歸去來辭」では淵明が官職をやめて帰郷したときであり、孝儀書翰では東魏使節の任務をおえて帰国したときだった、

ということだ。つまり両者の共通点として、いやな仕事をおえたときの解放感の表出として、この稚子出迎えの場面がつけられているのである。

すると、東魏使節として北地へでかけることは、老齡の孝儀にとつてこのましい任務ではなく、貧乏くじをひかされたものだったのではあるまいか。そうかかんがえると、つづくくたびれつつも蟹のあしを手にとり、そそくさと酒杯をかつたむけます。すると、それほどあかくならぬのに、いささか酒酔いしてしまいました」（倦握蟹螯、亟覆蝦椀。未改朱顔、略多自酔）という記述の裏にも、「やれやれ、いやな北地訪問を命じられたが、ぶじに帰還できてホツとしたわい」という、安堵の気もちがうかがえるようにおもふ。おもつに、この「ホツとしたわい」こそ、孝儀の本心であり、また「北使還与永豊侯書」の主題だったのかもしれない。

以上、劉孝儀「北使還与永豊侯書」を裏読みしつつ、作者のかくされた心情や意識をくみとり、それから推測される人となりや主題を指摘してきた。さきにのべたように、こつした裏読みが正鵠を射ているかどうかは、「たとえば拙稿を公

表した「か月後に」だれかが判定してくれるわけではない。しかし将来的に、六朝書翰研究の成果が積みかさなつてゆくうちに、やがて本稿の裏読みの適否も、あきらかになる日がやってくるにちがいない。私としては、その日がくるのを、首をあらつてまつことにしよう。

注

(1) 劉勰『文心雕龍』情采篇において、当時の詩文は「内心は高位をのぞんでいるくせに、隠遁をつたいあげ、心中で世俗の権勢に執着しているくせに、そらぞらしく仙界を叙したりする」(原文は「有志深軒冕、而汎詠皋壤、心纏幾務、而虛述人外」)とのべている。

(2) このときの李諧らの梁訪問については、堀内淳一『北朝社会における南朝文化の受容——外交使節と亡命者の影響』の第一章に詳しい。

(3) 劉孝儀『北使還与永豊侯書』への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、以下の業績を参照した。高歩瀛『南北朝文學要』(中華書局)、曹明綱『六朝文絮訳注』(上海古籍出版社)、史海陽、李竹君『六朝文絮訳注』(華夏出版社)。客亭——駅亭。交換用の馬をおき、かつ宿泊もできる施設。謁舎——旅館。上の「客亭」とほぼおなじ。対偶中の遊板をさけて、類語をつかったのだらう。

迄届氍毹——「氍毹」は、獸毛であった布のこと。胡族の鮮卑などはこの氍毹によって、衣服や敷物、住居(天幕)などをつくった。「氍毹」は、そうした氍毹を多用した都邑(東魏の都の鄴をいうか)の意か。この句は、そうした北方の都邑へやってきた、という意。

雜種——北方の胡族への蔑称。ここでは、遊牧や騎馬に従事する鮮卑族、あるいは彼らがたてた東魏の國をさす。

覃化——用例をみないが、たぶん「中華のよき影響が」および「教化する」の意だろう。ここでは、東魏の胡人たちが南朝の礼楽に教化される、の意だろう。

李緒之法——李緒がおしえた漢の兵法。李緒は前漢の將軍(漢人)だったが、のち匈奴に帰順して、漢の兵法をおしえた。漢の將軍の公孫敖が、この李緒を李陵だと勘ちがいで漢朝に報告したので、武帝は李陵を裏切り者だとし、その家族を誅殺したのだった。

衛律所治——衛律がおしえた漢の建築法。衛律は漢生まれの胡人だったが、のち匈奴にくだつて、漢の建築法をおしえたという。『漢書』匈奴伝上に「衛律は單于の為に謀る。井を穿ち城を築き、楼を治めて以て穀を蔵し、秦人との之を守る」とある。李緒と衛律の生涯は『漢書』李広蘇建伝にくわしく、そこをよむと、この二人は李陵や蘇武とも、ふかい関係を持っていることがわかる。

羈幘難淹——自分(劉孝儀)のような漢族は、胡人の住居にはながくすみにくい、ということ。「羈幘」は獸毛でつくつ

た天幕。李陵「答蘇武書」に「韋繡毳帳もて、以て風雨を禦ぐ」とある。

酪漿易鑿——自分（劉孝儀）のような漢族は、胡人の飲み物（酪漿）にはあきてしまった、ということ。「酪漿」は牛羊の乳汁。李陵「答蘇武書」に「膾肉酪漿もて、以て飢渴に充つ」とある。

王程有限——朝命による旅程には、きちんとした限度がある、つまり帰国する時期になった、の意。

時及玉関——「玉関」は、甘肅省の敦煌あたりにあった関所の名。正式には玉門関といい、漢の武帝のときに設置した。じつさいの地理から見ると、劉孝儀がおつたコースに玉門関があるはずもなく、ここでは東魏と梁との境界のことを、こう称したのでらう。「時に玉関に及ぶ」というのは、孝儀らが東魏訪問をおえて、梁の境内にかえつたことをいう。

射鹿胡奴、乃共帰国——前漢の張騫の西域訪問の故事をふまえる。大月氏と同盟して匈奴を挾撃せんとする漢武帝の計略のもと、張騫は匈奴人の甘父らをしてがえて、隴西を出発した。そしてさまざまの苦難をへて、「大月氏との同盟こそうまくゆかなかつたが」十三年後に甘父とともに漢に帰国したのである。鹿狩りがうまい胡奴とは、この甘父をさす。

「史記」大宛列伝に「堂邑の「甘」父は故胡人にして、射を善くし、窮急すれば禽獸を射て食に給せり」とある。

刻龍漢節、還持入塞——張騫は大月氏をたずねる途中、匈奴にとらわれてながく虜囚の身となつたが、漢の使者のあか

しである符節は、けつして手ばなさなかつたという。孝儀は自分を張騫になぞらえながら、この書翰文をつづっているのかもしれない。だが、「射鹿胡奴」以下の隔句対は、孝儀の東魏訪問を叙した場面であり、ここに西域訪問の典故をつかうのは、地理的にふさわしくない。

馬銜首宿、嘶立故墟——「首宿」は馬の飼料となるウマゴヤシ。もとは西域の産である。「東魏 遊牧がさかん

西域産のウマゴヤシ」の連想で、このことばをもちいたのだらう。「故墟」は東魏との国境付近の「梁の領土内の」地をいう。

人獲蒲萄、帰種旧里——「蒲萄」も首宿とおなじく、もとは西域の産である。「旧里」は梁をさす。この二句をふくむ「馬銜」云々の隔句対は、「史記」大宛列伝の「大」宛の左右は蒲陶を以て酒を為り、富人は酒を蔵して万余石に至る。久しき者は数十歳ありても「腐」敗せず。俗は酒を嗜み馬は首宿を嗜めり。漢使は其の実を取り來たる。是に於いて天子始めて首宿と蒲陶を肥饒の地に種えたり」をふまえる。

稚子出迎、善鄰相勞——陶淵明「歸去來辭」の「僮僕は歡迎し、稚子は門に候つ」をふまえるのだらう。

蟹螯——蟹のあし。酒のさかなとして、これを食するのだらう。

蝦蟇——旧時は蝦の頭を酒杯にしたという。この部分、文字どおり蝦の頭で酒をのんだかは疑問であり、おそらく酒杯の鍊字として、この語をもちいたのだらう。

(4) 劉孝儀はどうやら、自分を張鷟になぞらえようとしているようだ。さらにいえば、嚴密ではないものの、「匈奴」東魏、漢「梁」という比擬が、彼の脳裏にあったようにおもわれる。

(5) 于涌「南北朝交聘与文学伝播」(『文芸評論』二〇二三)。

四) は、「北使還与永豊侯書」の冒頭「足踐寒地、身犯朔風。暮宿客亭、晨炊謁舍。飄飄辛苦、迄届氈郷」をとりあげ、これらは北地のみみられる情景であり、南方の人ひとに淒涼の境を感じさせたろう、と指摘している。ただ私見によれば、「寒地」「朔風」「客亭」「謁舍」「飄飄」「辛苦」らは、当時では北地を叙するさいのふつうの語彙であり、べつだん珍奇なことではない(「氈郷」のみ用例を見ない)。その意味では、北地を表現するさいの常套的語彙をつかつて、それらしい雰囲気をかもしだしたというにすぎない。

(6) 兩漢の紀行の賦については、伊藤正文「所謂 紀行 の賦 について—遂初賦・北征賦をめぐる—」(小尾博士古希記念 中国学論集) 汲古書院、同「続・所謂 紀行 の賦 について—述行賦をめぐる—」(岡村繁教授退官記念論集 中国詩人論 汲古書院)などを参照。

(7) 『顏氏家訓』終制に「北朝では政道がきびしくて、隱逸なんぞはとつていゆるされなかった」(以北方政教嚴切、全無隱退者)とある。じつさい北朝では、隱者を許容するほどの政治的余裕がなかったため、隱者の数は、南朝にくらべると極端にすくなかった。そうしたことは劉孝儀もしていたはずで、だからこそ彼の脳裏のなかに、「北方は胡族の地

隱者がいない 「隱者がすまう」理想の山水もない
という連想が想起されたのだろう。

(文学部教授)